

三陸の海を放射能から守る

岩手の会

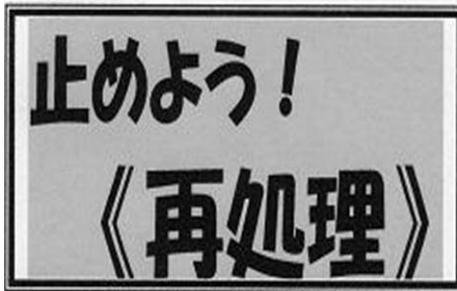
郵便振替 02240-5-102650

ホームページ《再処理 / 岩手の環境》

http://homepage3.nifty.com/gatayann/env.htm

《まった再処理分庫》

http://briefcase.yahoo.co.jp/k\_imag



《天恵の海》

2012(平成24)年

1月 16日

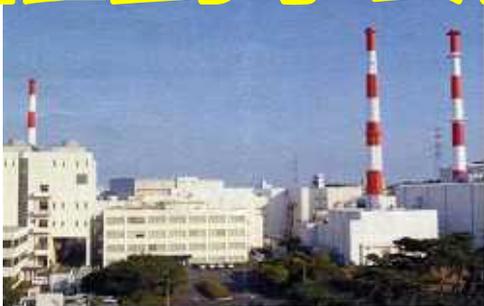
第107号

編集事務局 S.Oshida

TEL・FAX 019-623-1636

# 福島事故から何を学んだのか？

## 原子力研究開発機構からの回答書届く 再質問を通告



東海再処理施設

昨年十一月、全国七五市民団体が「東海再処理工場の高レベル廃液の安全管理についての質問状」を提出しましたが、年末に「回答書」が届きました。残念ながら原子力研究開発機構（JAEA）の姿勢は、悲惨な福島原発事故があつてなお危険な大事故を想定せず、事実には学ばず、学ばうとしない、無責任な樂觀論に終始しており、到底受け入れられる内容ではありません。提出時に通告したように、再質問のため、工場の技術責任者の出席をともなった交渉が必要です。

東海再処理工場の高レベル廃液

総量 393 m<sup>3</sup> **超危険物!**

濃度 1.0<sup>10</sup> Bq / cm<sup>3</sup> (回答書)

うちセシウム137 (六ヶ所資料から推定)

1.4 × 10<sup>18</sup> Bq (140 京 Bq)

\* 六ヶ所セシウム137 3.6 × 10<sup>9</sup> Bq / cm<sup>3</sup>

広島原爆 8.9 × 10<sup>13</sup> Bq (89 兆 Bq)

福島事故 1.5 × 10<sup>16</sup> Bq (1.5 京 Bq)

\* 出典 昨年6月 IAEA への政府報告書

広島原爆の1万5800 発分

福島事故放出の 94 倍の量

大変な量の高レベル放射性的の廃液である。

『環境に漏れ出すことはない』の一点張り  
原子力研究開発機構の「回答書」の基本姿勢は、何を聞いても「高レベル放射性廃液は環境に漏れ出すことはありません」と書かれていたところにあります。  
福島原発事故について国や東電は「想定外」と強弁していますが、とにかく「漏れ出す」事故がありうることを実証したのです。広島原爆の約一六八発分もの放射性物質を大気に放出した責任をとってほしいものです。  
福島原発事故の事実

を踏まえ、環境に漏れ出すことはありません」の一点張りでは、回答になりません。私たちは二度とあんな目にあいたくありません。思考停止もいよいよ加減にして欲しいものです。  
あめ玉一つ大で百億ベクレル  
回答書には、高レベル放射性廃液の濃度について「一立方センチあたり十の十乗ベクレル」とありました。これは「一〇〇億ベクレル」です。貯蔵総量の三九三立方センチでは約三九三京ベクレルという想像を絶する放射能です。東海工場の廃液は六ヶ所工場の廃液とほぼ同じような組成と推測できますから、そこから計算すると、セシウム137は約一四〇京ベクレルとなり、何と福島原発事故の大気への放出量の約九四倍にもなります。少しでも漏れたなら首都圏にある工場の位置からして破滅的な大災害になることは間違いありません。その最悪の場合を想定しない安全管理はあり得ません。

液体状では危険なことの自覚が薄い  
私達は、「高レベル廃液は崩壊熱を発生し、水素が発生するので液体状態の保存は危険である。ガラス固化の見通しはどうか」と質しましたが、回答書は、長期的にはガラス固化が優れているが、液体状でも冷却や水素の掃気を適切に行えば安全だと言いついています。実際には、ここ二〇数年間、廃液の量はほとんど減らず、ガラス固化の見通しを示すことができない状況にあります。  
冷却機能喪失後「四八時間」で沸騰  
高レベル廃液の冷却機能喪失について学会誌では、「約十五時間で沸騰する」とありますが、原研機構の回答書では「沸騰まで最短で四八時間かかると想定しています」とし、水素については「爆発まで、廃液貯蔵槽で約三〇時間以上」としています。どのような想定と試算なのでしょう。そしてさらに回答書では、そのための非常電源による冷却や窒素ボンベ等による

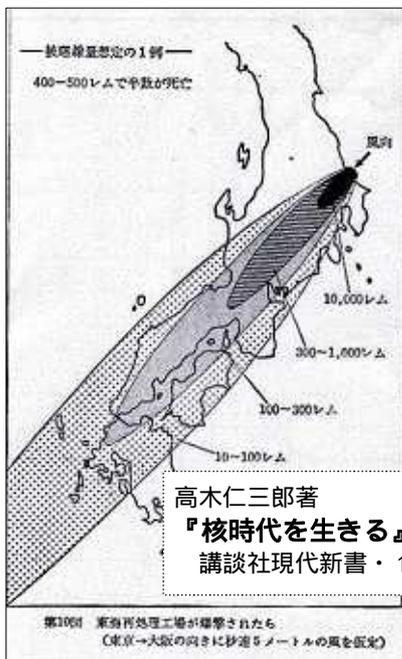
掃気機能の回復は、所内訓練により、沸騰防止が十六時間、水素掃気が十七・五時間で可能としていますが、福島原発事故のような同時多発する事故について全てが時間内に回復出来るとはとても思えません。

原発以上に複雑な工程  
東海工場には、危惧される放射性物質がいたる所にあります。回答書にあるように「高レベル放射性廃液貯槽」「プルトニウム溶液施設」「使用済み核燃料プール」の三つが先ず守るべき箇所ですが、これにも膨大な量の放射性物質があります。

この他にも、硝酸プルトニウム貯槽、「混合液槽」などがあり、化学

予想できないような異常事態が発生することは充分考えられるのであり、たった一回の訓練で対処出来るとは思われません。周辺住民

東海再処理工場放射能漏れ事故  
シミュレーションの一例



高木仁三郎著  
『核時代を生きる』169頁  
講談社現代新書・1983刊

第105回 東海再処理工場が爆発されたら  
(東京→大阪の向きに秒速5メートルの風を仮定)

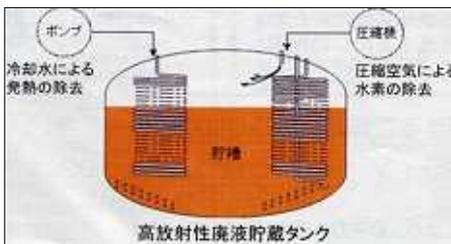
薬品と放射性物質が、縦横に巡らされたパイプラインを走り回り、反応槽や塔が入り組んでおり、その複雑さは原発の比ではありません。

三・一一には  
停電と断水、道路陥没

回答書では、東海再処理工場は三・一一には震度六弱の地震に襲われたが、安全上問題はなかった」とさりと述べて

いますが、実際には外部電源が四六時間停電し、断水が八五時間続き、道路陥没もありました。

を交えた避難訓練への言及もありません。珍説・津波の水没で、貯槽は海水冷却される



JAEA『フレンドリー通信』臨時増刊号  
2011.5.12 刊

岩手において今回の大津波を目撃している

私達は、「福島原発事故のように波高十五メートルの大津波に襲われた場合、廃液貯槽を守る最後の手段はあるのか」と強く質しました。

それについて回答書では、貯槽及び配管はステンレス鋼製で、セルは頑丈な鉄筋コンクリートで出来ているので、津波に耐えるとし、「水没状態の高放射性廃液貯槽は海水により冷却される」とことや、可搬窒素ポンベからのガス供給などから沸騰や爆発はなく周辺環境に影響は

ない、と書かれています。これが原子力技術に関する日本最高の専門機関の答弁でしょうか。

\*原文は「岩手の会」ホームページ参照  
<http://homepage3.nifty.com/gatavann/111129.html>

津波による絶大な破壊力から工場の安全機能を維持し、放射性物質の崩壊熱や、放射線分解水素の滞留を防がなければならぬときに、「海水で冷やされるから大丈夫」とは、子供じみた信じられない戯画的発想です。

の見解なし

私達は、一九五七年旧ソ連マヤーク再処理工場廃液爆発事故への見解や、一九七七年西ドイツ政府の「再処理事故、国民の半数死亡」の予測評価報告書についての見解を質しました。しかし、原研機構報告書には回答がありませんでした。日本政府や事業者がこのような過酷事故について、「事故予測評価」をしていないはずはありません。していないなら直ちに実施し発表するべきです。

即時再処理撤退を宣言し廃液の安全化を急げ液体状の高レベル廃液は危険。これは誰が考えてもわかることです。日本独自の東海方式ガラス固化技術はトラブル続きの未完成の技術です。欠陥技術のままこれ以上危険な高レベル廃液を作ってはなりません。

首都圏にある東海再処理工場はもろろん、その四倍の「処理」をめざす六ヶ所再処理工場は、膨大な資金を浪費しながら、完全に行き詰まっています。このような危険な工場は、今すぐ撤退を宣言し、廃液の完全な安全策を国民に見える形で実行するべきです。

試験再開を許すな  
六ヶ所再処理工場の



六ヶ所再処理工場

二〇〇八年十二月以来休止していた六ヶ所再処理工場が正月明けから突然に、アクティブ試験の準備に入ったと報せられています。福島原発事故により、全国のほとんどの原発が停止し核施設の安全の点検が行われているおり、また核燃料サイクルの是非が検討中である今、再処理工場の試験がなぜ再開されるようとしているのでしょうか。

全国市民団体が抗議文六ヶ所工場の再開の動きに対して全国的な抗議の声が上がっています。

経産省前集会とデモ  
政府に抗議文提出  
「福島老朽原発を考える会」など首都圏の市民は一月十六日に抗議と即時停止の要請文を提出します。

「原発さよなら署名」提出集会・再処理停止も一月二六日に設定されていた「原発さよなら署名」提出政府交渉集会において「六ヶ所再処理工場アクティブ試験再開反対・公開質問書」を準備し、政府を迫及することになりました。多くの市民グループの連名で呼びかけられています。